黒の魔法使い

ヨウヤク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒の魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ７６７４Ｅ

【作者名】
ヨウヤク

【あらすじ】
１５歳の少女リルは養母であり、魔法の師であるシルフィの遺言を果たそうとクルシクル帝国の首都である、サンタクリアに向かう。そして、様々な因果に巻き込まれていくことになる。

プロローグ

歳の頃は大体２０代後半といったところだろうか。緑の長い髪を腰の辺りまで伸ばした美女がじめじめとした暗い石造りの通路を歩いていた。時折、何か大きな獣のもののような唸り声が聞こえてくるが美女は気にした様子も無く歩いている。しばらく歩く明るい、光のついた部屋が見えた。美女はためらいもせずにその部屋に踏み込む。すると右側から大きな獣が美女に向かって飛び掛る。が、何か壁のような物に阻まれそのまま崩れ落ちる。

「キメラか」

一瞬だけ獣に視線を向け様々な特徴を持っている事を確認すると。美女はそう呟く。

「ようこそ。我が研究室へ」

部屋の奥から声が響く。

「それにしても素晴らしい。自然に放出されているだけの魔力だけであの重量をよせつけないとは」

一人の男が拍手をしながら奥から出てくる。

「たいした事はしてないですよ。ぶつかる瞬間にその方向だけに魔力を絞っただけですから」

美女わ大したことはしてないかのように軽い口調で返す。

「いやいや、謙遜なさる必要はないでしょう。普通の魔法使いならいくらその方法を取っても完全に防ぐことはできなかったでしょう。流石は風の使いといわれるだけはある」

美女の表情が僅かにひきしまる。

「私のことをご存知でしたか。では、何故、私がここに来たのか想像はつくでしょう。ここ数年の魔法使い誘拐の容疑であなたを検挙します」

美女がそう言いきると男は横を向いて自分の手の平を見つめた。

「魔力の量は生まれた時に決まっているという事をしっていますか？」

急な質問に美女は警戒を強める。

「私は魔力の量は少ない方でしてね。それこそ、普通の魔法使いでない人より若干多い程度でね。苦労しましたよ。僅かな魔力で効率よく魔法を使う方法を考えたり、戦術でカバーしたりね。結果、どんな相手でも同等以上に戦える自信をてにいれましたよ」

自慢するような内容に関わらず男の口調は重い。

「しかし、その認識は甘かった。生まれ持った才能に努力では勝てないということを、とある戦場である男が私にそれを教えてくれました。しかし、私は諦めなかった。そして、考えたのだ。手に入らないのなら奪えばいいのだと」

興奮した様子で熱弁をふるう男を美女は冷たい目で見つめていた。

「そんなに都合よくいく訳ないでしょうに。実際、あなたの魔力から判断するに失敗に終わったようですし」

美女が馬鹿にしたように言う。男は美女のほうを向くとにやりと笑った。その瞬間、圧倒的な魔法量を持った存在が美女のすぐ左側に現れる。

「なっ」

美女は驚きの声をあげるのと同時に身体を袈裟懸けに切り裂かれていた。

「まさか、あの傷で逃げるとは」

床に落ちた血痕を見つめながら男が言った。

「まあ、長くは持たないだろう。次はもっとうまくやるんだ。いいな」

男が背後の暗闇に言うと暗闇の中、何かが動いた。

第一話　師匠～別れ～

この世界で一番、広い国、クルシクル。その北端にある小さな小屋の中で少女が目を覚ました。　年頃は１４、１５といったところだろうか。漆黒の髪は肩まで真っ直ぐに伸び、尖った顎はどこか超越した美しさを醸し出している。少し視線を下げると右腕は肘まであろうかという手袋に包まれている。

少女はぼうっとしたままベットからおりるとふらふらと隣の部屋にあるキッチンまで移動、棚にある卵を取ると適当に炒め始める。少女の名前はリル、この家で養母であるシルフィを師に魔法を習っている。そのシルフィは一年前にクルシクルの首都、サンタクリアに行くという書き置きを残して行方をくらましたままだが養母が長期間、家を開けることは少なく無いということを熟知していたリルはのんびりと毎日を過ごしていた。

のんびりと炒めた卵を食べていると大きな音でドアを叩く音と声が聞こえてきた。

「リルちゃん。大変だよ。早く開けとくれ」

声でお隣さんのポルノおばさんだと判断したリルはゆっくり立ち上がる。ポルノのおばさんは褐色な髪と肌に恰幅の良い体格をしており、留守がちなシルフィに代わり、いろいろとリルの面倒をみてくれている。ついこの間の１５の誕生日には少しも女の子らしくしないリルに髪飾りを送ってくれたのもこの人だ。ドアを開けながらのんびりと挨拶をする。

「おはようございます。今日もいい天気ですね」

しかし、いつも笑っているおばさんの青白く切羽詰まった様子に

リルも僅かに、本当に僅かにいぶかしんだ表情を浮かべる。

「ああ、リルちゃん。何て言っていいか。とにかく、来ておくれ」

おばさんはリルの手首を掴むと大急ぎで村の入り口まで引っ張って行く。入り口にはリルのよく知る人が村の入り口にある門に寄りかかり座り込んでいる。

リルに気づくと笑みを浮かべた緑色の長い髪をした女性はリルの師匠であり養母であるシルフィだった。

「やぁ、リル。久しぶりだね」

落ち着いた口調で言っているが座り込んだ地面には血が池のように広がっている。リルは慌てて近寄り、膝立ちになると傷の様子を確認する。

「あなた程の人が誰にやられたんですか？」

驚き、怒り、悲しみ、戸惑い、その他様々な感情が混ざり合った結果、リルの口から出たのは無感情で抑揚の無い、冷たい声だった。

その声を聞くとシルフィは愉快そうに笑う。

「それでこそ私の娘だよ。魔法使いたる者はどんな時も冷静でいなくてはならない」

傷に障ったのか顔をしかめてシルフィは続ける。

「とりあえず質問に答えると答えは知らないだ。名前なんて聞か

なかったからね」

「リルちゃん、あんた魔法使いなんでしょ。何とかなんないのかい？」

おばさんがリルに尋ねる。

「もう、手遅れですよ」

答えたのはシルフィだった。

「今、私自身の魔法で何とか痛みを止めて長らえてるだけなんです。それにリルはそういった魔法は使えないので」

シルフィはリルの頬に手を伸ばす。

「さて、リル。もう時間も無いようだ。師匠として、そして母として最後に頼み事をしたいのだが、クルシクルに弟がいるんだが厄介事に巻き込まれていてね。力になってあげてほしいんだ」

リルが頷くとシルフィは嬉しそうに笑いリルの頬を撫でる。

「ありがとう。弟の名前はアルセム」

そう言うとシルフィは眠るように目を閉じた。　しばらく、誰も動かなかった。リルは立ち上がるとシルフィを肩に担ぎ歩き始める。

「リルちゃん？」

おばさんがリルに声をかける。

「家に帰ります」

リルは立ち止まり振り返らずにそう言うと再び歩き始めた。

（少し一人にしてあげようかね）

そう思ったおばさんはゆっくりと家に向かい歩き始めた。

夜になると、ポルノおばさんは多めに作った夕食の入った鍋を抱えリルの小屋を訪ねた。

「リルちゃん、夕食を持ってきたよ」

そう言ってドアを叩くが中から反応は返ってこない。不思議に思いながらもドアを開けて中に入る。

「リルちゃん？」

再び呼びかけるがやはり、応えはない。代わりに机の上に何か書いてある紙の切れ端が置いてあることに気付く。手にとって読んでみると師匠がやられた程の相手が絡んでいるなら一刻も早くクルシクルに行かなくては手遅れになるかもしれないこと。だから止められる前に出発すること。裏庭に作った師匠のお墓の管理をお願いするなどのことが書いてあった。

「リルちゃん」

ポルノおばさんはただただ、呆然とするしか無かった。

第一話　師匠～別れ～（後書き）

はやくも退場のシルフィですが、書きたいエピソードの多いキャラなのでそのうち短編で登場するかもです。

第二話　都〜戦闘〜

「凄い」

黒い髪に黒いニット帽、右手だけ肘までである黒い手袋をした奇妙な格好の少女、リルは感嘆の声を漏らした。村を出てたまたまサンタクリアに行くという商隊に混ぜてもらい5日目、リルはサンタクリアに着いた。どこを見ても人が視線いっぱいに入ってくるなんてことは辺境の小さな村で暮らしていたリルにとっては初めての経験だった。

「これがサンタクリアだよ」

恰幅の良い商人の男、ヤクが後ろから声をかけてくる。

「ここは東西南北の貿易の中心地だから物が集まる。物が集まるから人も集まるのさ」

ヤクは自慢気に言う。　ところで、とヤクは続ける。

「お嬢ちゃんはこれからどうするんだい？」

「そうですね、人を捜すならどうしたらいいでしょうか？」

リルが尋ねるとヤクは顎に手をやり考えるような仕草をとる。

「そうさな、酒場なら情報は多少あるだろうし、金があるなら情報屋に行ってみるといいだろうよ」

そう言われてリルは自分の凹凸の無い体を見下ろす。

「あたしでも酒場って入れるのでしょうか」

リル自身は真面目だったのだがそれを聞いたヤクは大笑いした。

「そりぁそうだ。入れてもまず相手にはされないな」

気を悪くしたリルはむっとした表情で礼をすると　反対側を向き歩き始める。

「嬢ちゃん、待ちな」

ヤクの呼びかけにリルが振り向くと胸元に丸められたが飛んでくる。慌てて受け止めヤクを見るとヤクは笑みを浮かべ

「それに書いてある名前の店に行ってみな。話しは通しておくよ」

そう言うとヤクは手を振りながら去っていく。その後ろ姿に向かい、リルはもう一度頭を下げた。

そして、数分後リルは

「ここはどこなんでしょうか？」

迷っていた。　小さい村で育った影響で迷子になったことも無く、解決策も分からず、もう暗くなるにも関わらずただぼんやりと歩くことしかできなかった。

「もうちょっときちんと話しを聞いてれば良かったですね。それにしても夕方とはいえ、普通、ここまで人がいないものでしょうか」

辺りを見回してもリル以外に出歩いている人影は見当たらない。その、背後に大きな昆虫のような影が忍び寄り、その脚を振り下ろした。

「なるほど、こういう事ですか」

その一撃を横に飛び避けたリルは呟く。

「ワーム、魔法使いの生み出した人工的な生き物ですか。大した大きさですね」

リルは3メートル以上、上にあるワームの頭を見上げる。

「キシャー」

奇声を上げて襲いかかってくるワームにリルは左手を上げて炎を放つ。しかし、ワームの体は炎を弾くきながら突っ込んでくる。

「なんて、硬さですか」

リルはバックステップでかわす。ワームの頭はリルの避けたところの地面を粉々に砕く。

「当たったらひとたまりもないですね」

ワームは自分で突っ込みダメージ受けたのか頭を左右に振っている。リルは左拳を握ると一瞬でワームの頭付近に近づき、頭に向かい拳を振り下ろした。グシャリという嫌な音と共にワームの堅い外殻を貫き柔らかい中身に届く。

数度、痙攣するとワームは動かなくなる。

「ふぅ」

リルがため息をつくと、松明を持った男達に囲まれる。

「動くな！！逮捕する」

「勘弁してくださいよ……」

うんざりとした表情でリルは言った。

第三話　少年～出会い～（前書き）

出会いなんて題名ですが殺伐としてます

第三話　少年～出会い～

「で、なんだ？お前は道に迷ってるところをワームに出くわしたと？」

男の質問にリルはこくんと頷く。

今、真っ白な部屋の中ではリルと背は１９０はあるだれうかという良く鍛えられた体格の良い軍服を着た男が机を挟み、向かい合って座っている。

「それで、武器も何も持っていないお前が倒したと？」

再びリルは頷く。男はゆっくりと息を吐きながら組んでいた腕をとく。やっと終わりかとリルの表情が弛む。

「そんな訳があるか！！」

男はといた右手で思い切り机を殴った。音とともにリルの体がびくりとする。

「武器も持ってないガキに倒せるレベルのものじゃあないだろう」

「だから、魔法でです」

「魔法だぁ？計測器によるとお前の魔力はＥ＋、魔法使いとしては最低レベルだ。そんなのであいつが倒せるものか。誰があれを倒したんだ？」

男が身を乗り出してくる。

「あたしです」

埒のあかない会話に苛立った男はがしがしと頭を掻く。その時、軍服を着た細身の青年が部屋に入ってきた。青年は金髪を三つ編みにしている。端正な顔には目のすぐ横から口にかけて大きな傷があるが、彼の美貌は損なわれるどころか逆に男らしさを増すこととなっている。青年は椅子に座る男に問いかける。

「タラスクスさん、どんな様子ですか？」

「スピンドルか、駄目だな。全然、吐きやしない。私が倒したの一点張りだ」

スピンドルと呼ばれた青年は少し考えた素振りをすると、イタズラを思いついた悪ガキのような顔をする。

「では実際に力を見せてもらいましょうか」

スピンドルは、本当のこと言ってるのにと頬を膨らますリルを眺め提案した。

リルが連れて来られたのは広いホールだった。行きがけでの話によるとスピンドルという青年は軍の中でも部隊長、総隊長のすぐ下の身分らしい。総隊長が一番上だから二番に偉いということになる。

ホールでは様々な人が剣で打ち合ったり、魔法の訓練をしたりし

ている。

「ライ。ちょっといいかい？」

スピンドルは、その中で長剣を使っている赤色の髪の女性と槍で打ち合っている少年に呼びかける。

「隊長、何かご用ですか」

茶色の髪を短く刈ったライとよばれた少年、といっても17歳ほどだから青年といった方が的確か。は赤色の髪の女性に礼をすると素早く駆け寄って来ると幼さを残す顔に満開の笑みを浮かべる。

「実はね、この子と模擬戦をして欲しいんだ」

スピンドルはライにそう言うと次はリルに顔を向ける。

「この子はライオネル、ウチの部隊じゃ最年少だけど実力はあるよ。魔力はAだし。この間、単独でワームも倒している。ライオネルとの模擬戦の様子から君が言ってることが本当か判断しよう」

「こんなガキと模擬戦ですか？」

ライオネルは露骨に嫌そうな顔をする。

「そんなこと言わないで、この子もワームを倒したことあるし」

その一言にライオネルは素早く反応する。

「それ、本当ですか？」

「本当かもしれない。自分では倒したと言ってるけど」

「分かりました。やらせてください」

ライオネルはスピンドルに頭を下げるとリルを睨みつける。リルは明らかな敵意を含んだ視線に特に反応せずに見返した。

「こっちに来い」

ライオネルは顎で誰もいない箇所を示すと先に移動して行く。リルもそれに黙って付いていく。

「あの子、ワームを倒したって？」

先程、ライオネルと訓練をしていた赤色の髪に眼帯をした女性がゆっくり歩いて来てスピンドルに問いかける。

「さて、本人はそう言ってますが」

「ちょっと平気なの？ライオネル、本気の顔してるわよ。それが嘘だったら」

赤色の髪の女性は少し心配そうに尋ねる。

「まぁ、大丈夫でしょう。嘘だったら助けには入りますし、懲りて本当の事を教えてくれるっしょう。

それに、もし本当だったら……」

スピンドルは意味あり気に言葉を切る。

「まさか、あんた。まだ、子供じゃない。それに本当なんて確率、無いに等しいわよ。あの子、魔力もほとんど感じないし」

「さて、それはどうでしょう？」

スピンドルは不敵な笑みを浮かべると、今にも戦いを始めようとしている二人に視線を移した。

「最初に聞いておきたい。お前、本当にワームを倒したのか？」

空いているスペースに着くとライオネルはリルに問いかけた。リルが頷くと舌打ちをした。

「気に入らないな。ワームは俺達でも何年も修行して倒せるようになる上級の人工生物だ。お前みたいなガキに倒せる代物じゃあないんだよ」

「じゃあ、止めますか？」

「まさか、化けの皮を剥がしてやるぜ」

ライオネルは体勢を低くし木製の練習用の槍を構える。　それに対しリルは何も構えず直立のままだ。

「武器がないなら。貸すぞ」

何も持ってないリルにライオネルが構えたまま短く尋ねる。

「いえ、お構いなく。いつでも来て良いですよ」

リルは何時も通りのんびりと答える。

「ち、嘗めやがって」

ライオネルは呟くと黙った。しばらく、二人は動かなかった。片やいたって自然体で、片や緊張感の漂う構えのままで。

先に動いたのはライオネルだった。ライオネルは溜に溜めた力を一気に解放すると獣のような速さでリルに一直線に突っ込んだ。一番、自信を持っている突進からの突き。

（手加減は無しだ）

狙うは奇妙な手袋を付けている右手の肩。リルはまだ動いていない。　もう、避けられない。そう確信し槍を突き出した。しかし、瞬間、リルの姿は消え槍は空を切っただけであった。

「なっ！！」

ライオネルは必殺の一撃をかわされた上に相手の姿を見失った事に焦り辺りを見回す。

「速度は凄いですけど、視界が狭まってしまってますし、あまり実戦向けじゃ無いですね」

そんなリルの声が背後から聞こえ、ライオネルは慌てて、その場から飛び退く。

「じゃあ、次はこっちからいってもいいですか」

リルはいつもどおりの表情でライオネルに尋ねた。
少し離れたところでは二人の大人が驚きを隠せずにいた。
「スピンドル。今の見えた？」
赤色の髪の女性が愕然として聞く。
「かろうじてですが」
こちらも驚きの色を残した声で返す。
「あの子、何者？これはもしかしたらもしかするわよ」
ライオネルは怒っていた。今の好機に攻撃してこなかったこと、自分が目の前の年下の少女に劣っているという現実に。そして、それは行動で示された。
ライオネルは腰だめに槍を構えると魔力を集中する。
「食らえ！！」
叫ぶような怒声とともに槍の先から金色の光が放たれる。それは一瞬で奥の壁まで到達すると壁を僅かに融解させて止まった。　荒い息を吐きながらライオネルは後悔の念に襲われた。今の一撃を喰らったら骨も残らなかっただろう。そして、避けられたとは思えない。
（確かに腹立たしいところは多かったが殺すつもりは無かったの

に）

ライオネルは呆然と立ち尽くした。

しかし

「避けてくださいね」

背後からあり得ない声が聞こえ自分を取り戻す。振り向くとリルが左手を振りかぶり、ライオネルの顔を殴ろうとしているところだった。慌てて後ろに下がるとリルの左手はそのまま手首まで地面に突き刺さった。

（もし、あれが、当たってたら。いや、警告されてなかったら）

リルが腕を引き抜くのを呆然と見ながらライオネルは青くなった。

（今のはちょっと焦りました）

リルは手のひらに汗をかいていることを自覚しながら思った。指向性を持たせた魔力を相手にぶつける。あんなに早く、強いと思わなかった。

（魔力による身体強化が後、一秒でも遅かったら消し炭でしたね）

口には出さずに独白するとライオネルに戦意を無くしていることを確認してからスピンドルに目を向ける。

「実力を見せるだけなら充分だと思いますけど？」

そうリルが尋ねるとスピンドルは頷く。それを確認するとリルは呆然と自分に目を向けているライオネルに礼をし外に足を向け歩き始める。出口で足を止めて振り向くとライオネルが　赤色の髪の女性に怒鳴られている。何か悪い事をしたような気になったリルは足早に外に出ていった。

第四話　店～優しさ～

「この馬鹿、こんなところであんな技、使って」

赤色の髪の女性はライオネルの頭をゴツンと殴る。

「すみません。頭に血がのぼっちゃって」

頭を抑え目に涙を溜めながらライオネルは謝罪を口にする。

「まぁ、面白いものが見れましたし、いいじゃないですか」

スピンドルが肩を怒らせている赤色の髪の女性を宥める。

「それより、隊長、あれは何なんですか？あのスピード、普通じゃ無いですよ」

「それは、私も聞きたいわね」

二人の視線がスピンドルに集中する。

「多分、あれは魔力による身体の強化。もう、大昔に滅びた技の一つですよ」

「そんな技をなんであんなガキが？」

ライオネルが納得のいかない顔で尋ねる。

「さぁ、それは分かりませんが、あの年でなかなかな人生を送っ

てきたんでしょうね」

スピンドルはリルの出て行った出口を見た。

朝の道、リルはふらふらと歩いていた。ワームと戦った上に結局、昨日は保留させられたり模擬戦をしたりして徹夜したため、１４歳のリルの眠気はいい加減は限界だった。

（これは、まずいかもです）

今にも倒れそうなリルに救いの手は差し伸べられた。

「ちょっとアンタ大丈夫？ひどい顔色だよ」

今から店を開くのか店のドアの鍵を開けようとした白い髪の女性が心配そうな顔で近づいてくる。それを目の端で確認したのを最後にリルは意識を手放した。

目を開くと知らない天井だった。リルは身を起こして辺りを見回す。ベッドの横には机があり色々な写真が置いてある。どれも共通しているのは写っている人達が笑顔だということだ。

リルが写真を見ていると後ろのドアが開く音がする。

「おっ、起きたみたいだね。全く、いきなり倒れるんだから」

ドアを開けた白い髪の女性は陽気に言う。

「すみません。ありがとうございました」

女性の一言で自分の現状を理解したリルは頭を下げる。

「いえいえ、どういたしまして。あなた、リルちゃんでしょ」

リルがびっくりして目を開くと女性は愉快そうに笑う。

「やっぱりね。ヤクから話は聞いてたよ。珍しい黒髪で変な黒い手袋した女の子が来たら力になってやってくれってね」

「えっ、では」

リルはヤクにもらった紙を取り出し読む。

「ここが“ヴーチュズ”ですか」

「ああ、そうだよ。でも、ちょっと待っててくれよ。様子見てくるって店、抜け出してんだ。話しは後で聞くからさ」

そう言ってきびすを返し下に帰ろうとする女性をリルは呼び止める。

「あのっ、あなたの名前は」

「私はハニェル＝ゾフィ。よろしくね。リル」

最後にウインクをするとハニェルは階下に消えて行く。

窓の外を見るともう夕焼けが街を染めていた。

それから３０分ほどしてハニェルは戻って来た。手には湯気の

たっている皿を持っている。それを見た途端、リルの胃袋が抗議の声を挙げた。表情を変えずに顔を真っ赤にするリルを見てハニェルは豪快に大笑いをする。

「さぁ、お腹すいたろ。お食べ」

慌ててかき込み、熱さにむせてしまう。その背をハニェルはゆっくり撫でてくれる。

「ゆっくりお食べ、逃げやしないよ」

リルは今度は慎重に食べていく。全部、食べた頃を見計らってハニェルは話しを始める。

「で、どうしたんだい？」

リルが理由を話すとハニェルは少し怒った顔をした。

「その師匠って人も酷い人だね」

不満を隠しもせずにハニェルは言う。

「どうしてですか？」

「だって、そうだろ。一年もこんな子供をほったらかしにした上、厄介事を押し付けて死んじまったんだろ」

ハニェルの言葉にリルは頷く。

「それで、アンタは何で言いなりに動いてるのさ」

「それは師匠が頼んだから」

「そうじゃ無くって」

ハニェルは苛立ったように声を荒げる。

「なんで、そんな頼み事を聴くのかって事だゆ。聞いた感じじゃあ母親らしいこと何にもしてもらってないんでしょ」

「まぁ、そう言うことに疎い人でしたし。必死に母親の代わりになろうとはしたりしてくれましたし。何より、あたしを救ってくれましたから。それだけで充分感謝してます」

（そう、あの地獄から救ってくれた）

リルの穏やかな顔を見てハニェルは笑顔にもどる。

「まぁ、いいや。あたしに任せな。絶対にそのアルセムっての見つけてあげるよ」

ハニェルはその豊満な胸を自信あり気に拳で叩いた。

第五話　友達～握手～

（私は何をしているんでしょうか？）

色々な人が食事をしている店の中、普段着の上に白いエプロンをつけたリルは誰にも気づかれないようにそっと溜め息をついた。奥の厨房ではハニェルが調理をしているのだろう何かを炒める音が聞こえてくる。

ハニェルの切り盛りをしている“ヴーチュズ”は所謂、民間食堂のようなところで。ハニェルが素材を厳選し作るオムレツが人気で、いつも、客で賑わっている。

「泊まるからは働く」

というハニェルの言葉でリルは食堂に引っ張り出され接客をさせられているのであった。

溜め息をつきながらも次第に板についてきた仕草で接客をしていると

「ここです。ここが旨いんです」

「ふーん。感じのいい店ね」

という声と共に二人の客が店に入ってくる。

「いらっしゃいませ」

リルが振り替えり頭を下げると

「げっ」

という声が頭の上から聞こえてくる。訝しんで顔を上げると先日、戦った少年、ライオネルだった。

「ああ、ライオネルさん……でしたっけ？」

目のあったライオネルは気まずそうに視線を逸らす。

「へぇ、お嬢ちゃん。ここで働いてんだ」

もう一人もリルは見覚えがあった。自分達の戦いを見てた赤色の髪の女性。

「えっと」

「あぁ、私はストラス＝クルイロ。ストラでいいわよ」

赤色の髪の女性、ストラは快活な口調で言う。

リルは頷くと空いてる席に二人を案内する。

「とりあえず、ここに」

適当な席に案内するとライオネルはためらいながら、ストラはゆっくりと席につく。

「ご注文は？」

リルが尋ねるとライオネルは目を逸らしたまま返事をする。

「……特製オムレツ。２つ。ストラさんもいいですね？」

ストラスが頷くのを確認するとリルは奥の厨房に行きハニェルに注文を伝える。

「特製オムレツ２つです」

「はいはい。それにしてもリルちゃん、大分慣れてきたみたいだね」

ハニェルは奥の棚から卵を取り出しながら言う。

「そうですか？」

「ああ、何かうちの看板娘って感じだしね。お客さんからの評判もいいし。ずっと、ここで働くかい？」

ハニェルがオムレツを作るのは見つめながらリルはしばらく考え言った。

「用事さえ終われば、それもいいかもしれません」

リルはそう答えた自分自身に驚く。しかし、そう思うのは無理ないのかもしれないとも思った。

（ここは本当に居心地がいいのだから）

この店にはいつも、笑顔が沢山あって、一人でいる事が多かったリルにとって、とても暖かい場所だった。

「本当かい？じゃあ情報、とっとと集めちゃうね」

軽く言うハニェルにリルは疑問を尋ねる。

「いったい、ハニェルさんはどうやって情報を集めるんですか？」

「まぁ、いろいろと昔のツテでね」

ハニェルは振り向きリルに笑みを浮かべる。

リルが納得のいかない顔で再び、オムレツを作りにもどったハニェルを見つめているとハニェルは手に2つのオムレツを持ち振り返った。

「そんなことより出来たから持って行きな」

リルがオムレツを持って行くとストラはいずライオネルだけしかいなかった。

「オムレツ、持ってきました」

しかし、ライオネルは違う方を見たままで反応しない。

（やっぱり昨日の事をひきずってるんですかね）

リルはそう考えながらオムレツを机の上に並べると一礼し去ろうとした。しかし、後ろから声が聞こえた気がして振り返る。

「何か言いましたか？」

「悪かったって言ってんだよ」

相変わらずの態度だったが今度はライオネルははっきりと答えた。

「何のことですか？」

「だから昨日、お前を馬鹿にするような事を言って悪かったって言ってんだよ」

ライオネルは苛立ったかのように言った。

「別にきにしてませんよ」

「そういう訳にはいかない。俺にもけじめってもんがある。何か俺に出来ることはないのか」

「……じゃあ一つだけ頼み事を聞いてください」

食い下がってくるライオネルにリルは左手を差し出した。

「友達になってください」

ライオネルは一瞬、呆気にとられた表情を浮かべるが、直ぐに

笑みを浮かべてリルの手を取った。

「そんなことでいいならお安い御用だ」

第六話　勧誘～約束～

そういえばストラさんは何処ですか？」

リルは左右を見回す。

「あの人は緊急の呼び出しとかでちょっとな」

ライオネルはオムレツに手をつける。

「緊急？」

「ああ、あの人、あれでうちのＮｏ．２だから、結構そういうことがあるんだよ」

「たいへんですね」

ライオネルは不意に真面目な顔になる。

「そう大変なんだよ。、だから、お前、うちの部隊に入らないか？」

リルはきょとんとした表情を浮かべる。

「私ですか？」

「ああ、魔力は低くてもあの術があれば充分だ。今、サンタクリアじゃあちょっと変な事が起きてんだ。ほら、お前もワームに襲われたろ」

リルは頷くとライオネルは話を続ける。

「あいつら毎日、現れては魔法使いばかり狙って攫って行くんだ。被害者はもう３０人をこえてる。うちの部隊の奴も何人かやられてる。正直、人手不足だ」

リルは少し考えた後に首を横に振った。

「別に危険な事をしてくれって言ってんじゃないんだ。事後処理とかでも手伝ってもらえたら」

「こら、しつこいと嫌われるわよ」

リルの後ろからいつの間にか戻ってきたストラがライオネルに言った。

「ストラさん、けど」

ライオネルが言うとストラは顔をしかめる。

「けどじゃないの、謝らないと」

ストラに促されライオネルはリルに頭を下げる。

「悪かったな。ちょっと熱くなりすぎた。けど、めんどくさいからとかいう理由なら納得いかないぜ」

ライオネルは頭を下げる。

「すみません。私にもやらなくちゃいけないことがあるんです」

リルは顔を伏せ手袋に包まれた右手を左手で抑える。　そして、口を開いた。

「だけど……どうしても私の力が必要になったら。その時は相談をしに来てください。出来るだけ力にはなる……つもりです。友達として」

リルは一礼をすると奥に戻って行った。

「何かあいつも複雑そうですね。ストラさん」

ライオネルがストラの方を見るとストラは難しい顔をしている。

「ストラさん？」

「あの腕、まさかね」

ストラは小声で呟くと残っていたオムレツに手をつけた。

第七話　殲滅～対面～

話があるとハニェルがリルを部屋に呼び出したのは二日後の夜だった。

「ハニェルさん、リルです」

リルはハニェルの部屋のドアを軽く叩く。

「開いてるから入って」

声に導かれリルが部屋に入るとハニェルが部屋の真ん中に座っている。周りには書類が周りに散らばっている。

「汚くてごめんね。適当にその辺に座って」

言われた通りに書類をどかしスペースを作るとそこに座った。

「アルセムって名前なんだけど該当したのは一人だけ。でも、ちょっと問題があるのよね」

手に取った書類からハニェルはリルに探るような視線を送る。

「構いません」

リルが言うとハニェルは頷き、一枚の写真をさしだした。写真には薄い緑色の短い髪をした少年が写っている。

「アルセム・クルシクル。面の名前はヨハン・クルシクル。１４歳。この国の王子様よ。ヨハンっていうのは公表されてる名前に対してアルセムっていうのは家族とか親しい仲で使われる隠された名前なのよ」

「どうすれば彼に会えますか」

「仮にも王子だから会うのはかなり難しいかもしれないわね。一番、簡単なのは……」

言葉を切ってハニェルは表情を引き締める。

「ハニェルさん？」

リルが不思議そうに尋ねると下の階でバタンとドアの閉まる音がした。

「やれやれ、こんな夜更けに。もうとっくに店じまいは住んでるっていうのにね」

ハニェルは首を左右に振ると立ち上がった。

「ハニェルさん、私も行きます」

リルも続いて立ち上がるとハニェルは頷く。

「うん、リルちゃんにも来てもらった方がいいかな」

一階に行くとライオネルが立っていた。

「ライオネルさん？」

リルが声をかけるとライオネルは笑みを浮かべた。

「よう、リル」

「どうしたんですか？こんな時間に」

「この間の助けてくれるって約束。もう使っちゃってもいいか？」

「別にいいですけど何かあったんですか？」

「ちょっとな」

ライオネルは苦笑いを浮かべる。

「ライオネル君だっけ？あんまり喋らない方がいいよ。その傷、浅くはないでしょ」

ハニェルはライオネルの脇腹の辺りを見る。

「傷？」

リルもつられてライオネルの脇腹を見るとおびただしい量の血で濡れている。

「ライオネルさん！」

リルの悲鳴にライオネルは再び苦笑いを浮かべた。

「騒ぐなよ傷に響く」

ライオネルはそう言うとゆっくりと膝をついた。

「早く手当てを」

リルは焦って奥に行こうとするのをハニェルが引き止める。

「まぁ、私に任せて」

ハニェルはライオネルの傷口に手を触れた。ハニェルが触れると血はすぐに止まっていく。

「治癒魔法？」

「そんな大層な物じゃないよ。血液を操作して循環させているだけ。でも、血が流れることは無いし。血が流れなければ死ぬことはない」

「ありがとうございます」

ライオネルはハニェルに言うとリルに再び目を向ける。

「助けてほしいんだ。今、うちの部署が受け持ってる任務で少しまずいことになってんだ」

リルは黙って頷く。

「場所は何処ですか？」

「サンタクリアの右の端。東門の脇に小さな小屋がある。騒ぎになってるからすぐにわかる」

リルは頷くと立ち上がった。

「行くのね」

ハニェルが尋ねるとリルはハニェルに向かい合う。

「はい、約束しましたから」

「行ってらっしゃい。明日の開店には戻って来るんだよ」

リルは頷くと飛び出して行った。

「さて、私も片付けておきますか」

リルを見送るとハニェルは店の奥に視線を向ける。

「出てきなさい。この子を追ってきたんでしょ？」

視線の先からは人間より一回り大きい異形の人の形をしたものが出てくる。そいつは姿勢を低くすると刃のような両腕を構え、威嚇するかの様に声をあげる。

「いいよ。来るなら来なさい」

挑戦的な口調でハニェルが告げるとそいつは襲いかかり腕を振

り下ろした。しかし、その刃は水球が受け止めハニェルには届かなかった。

リルが小屋に着くと小屋は大勢の様々な異形の怪物に取り囲まれていた。小屋の周りには薄白い壁のような物で包まれ、群れの中心ではストラが大剣をスピンドルがレイピアを振るっている。しかし、立っているのは二人だけで周りには赤い血が散らばっている。

（数は２００くらいかな？）

リルは拳を握ると手や足に魔力を溜める。リルの四肢が僅かに発光する。それを確認するとリルは怪物の群れの真ん中に突っ込んだ。手当たり次第に怪物を殴り倒しながらリルは進んだ。

「ストラ、まだ生きてますか？」

スピンドルは少し離れたストラに大声で尋ねた。

「なんとかね」

ストラは肩で大きく息をしながら怒鳴り返した。

「何とかライオネルは逃がせたみたいですね。結界もまだ持ってるようですし」

スピンドルは一度、小屋に目をやると声をたよりにストラのもとにたどり着くと背中合わせになった。

「あぁ、しかし今度は私達が危ないぞ」

「ええ、まぁ、あなたと一緒に死ぬなら本望ですが」

「なっ、何を言ってるんだ！！」

ストラは顔を赤らめ振り向いたそこに怪物が襲いかかるが怪物の顔にリルに拳がめり込んだ。

「何をしてるですか？」

リルが呆れた顔を向けるとストラは慌てて首を振る。

「違うんだ。これは」

「やぁ、リル君。よく来てくれましたね。珍しいからよく見ておいた方がいいですよ。こんなストラ、めったに見れませんよ」

スピンドルが飛びかかってきた一体を切り伏せる。

「まだ、余裕はありますか？」

リルはそれを無視して質問する。

「正直、もう限界ですね」

スピンドルが言うとリルは頷く。

「分かりました。では下がっていてください。あとは私がやります」

「一人でなんて！！」

ストラがリルを止めようとするのをスピンドルはストラの肩において首を振り止めた。

「大丈夫ですよ。ねっ」

リルは頷くとストラも渋々、小屋に張ってある結界の中までさがる。リルはそれを確認すると怪物の群れに突っ込んで行く。凄まじい速度で近づくと怪物の顔を殴り飛ばし、関節を砕き、胴体を蹴り飛ばす。目に止まらない速さで次々に怪物を倒していく。

「こんなことって……」

小さな少女が目にも止まらない速さで自分の倍もあるような大きさの敵を倒していく。そんな光景を目にしストラは圧倒されていた。

「ええ、私達は何をしてたんだって思わせる光景ですね」

スピンドルは腰を落とす。

「私達に出来ることはもう無さそうですね」

リルが全ての敵を倒すのに、そう長い時間はかからなかった。最後の一体に拳を叩き込むとリルは大きく息をつく。それと同時に四肢の光も収まっていく。

「お疲れさまです」

小屋から出てきたスピンドルがリルに声をかける。
「いえ、間に合って良かったです」
「本当に助かりましたよ。守りきることもできましたし」
スピンドルは視線を小屋に向ける。
「あの小屋、何を、いえ、誰を守っていたんですか？」
スピンドルは驚いた表情を浮かべる。
「分かるんですか？」
「はい。気配を感じますから」
「やれやれ、君って子は。
ストラ、お連れになってください」
スピンドルは呆れた顔を浮かべ振り向くと小屋の扉の前で待機していたストラに声をかける。
「いいのかい？」
ストラはスピンドルが頷くのを確認すると一度、小屋に戻り、一人の少年を連れてくる。その姿がはっきり見えた時、リルは目を見開いた。
少年はリルの前まで来ると一礼し言った。
「助けてくださいありがとうございます。私はヨハネ・クルシ

クルと言います」

第八話　会合～暗雲～

「いいですかリル様。淑女たるもの、自分を美しく飾り付けなければなりません。それが、あんな野暮ったい服などを着てはいけません。本当なら、その手袋だって外していただきたいのですよ」

大柄のメイドに髪やら服やらを色々と整えられながらリルはバレないよいにそっとため息をついた。

あの後、スピンドル等に連れられ城に入ったリルは壮絶な叫び声に迎えられた。叫び声を上げたのはメイド長のミナスという女性ですぐさま近くの部下に湯を沸かすよう指示をするとリルの手を引っ張り浴場まで連れて行き服を脱がし始める。リルの必死の抵抗により手袋だけは勘弁してもらったが他の服脱がされた服は持って行かれ裸にされたリルは湯船に叩き落とされる。そして、全身を洗われ今に至るのである。

「メイド長、こんな服はどうでしょう？」

1人のメイドの持ってきた服を見て、リルは倒れそうになった。ピンクがベースで裾にはレースがふんだんに使われ、首もとには血のように赤いルビーが飾り付けてある。

「ダメです。それより白いドレスにしましょう」

ミナスが首を振り、自分でドレスを取り出して来る。リルはもう一度ため息をついた。

「へぇ、化けたもんだね」

椅子に座ったストラが少し驚いた表情で部屋に入って来たリルに声をかける。青いラインの入った白いドレスで身を包み、同じく髪にも白い花の髪飾りをつけたリルは恨みがましい視線をストラに向ける。

「何でストラさんは何も言われないんですか」

「昔は散々言われたさ。見つかる度に逃げてたら向こうも諦めたみたいでね」

ストラは笑い声を上げる。

「いや、でも本当にに綺麗ですよ。まるで天使みたいです」

スピンドルの言葉に一瞬、リルは目を伏せる。スピンドルはそれを目敏く見つけるが何も言わなかった。

「そういえば殿下はどこに？」

細長い長方形の部屋で同じく長方形の机に着いているのはスピンドルとストラだけだ。

「もうすぐお出でになりますよ」

辺りを見回すリルにスピンドルが言うと、奥の扉が開いた。

「皆さん、お待たせしました」

ヨハネが一人ね頭にフードをかぶった女性を連れ扉から入って

きて席に着く。

「では、会議を始めましょうか。リルさん、あなたはどれくらい状況を把握してますか？」

「私が知ってるのはワームが毎日、現れて魔法使いが襲われてることくらいです」

リルの答えにスピンドルは頷く。

「それが、一般の人にしている説明です。本当はそれだけじゃないんです。ワームに襲われた人の姿はもちろん遺体すら見つかってないのです。つまりは襲われた後、連れさらわれている可能性が高い。そして、今度は殿下が襲われると、そこに座っているラミアさんが予言したわけです。そして、今夜も同様に私の部下もさらわれたことを見ると同一犯でしょう」

リルが見るとラミアと呼ばれた女性は僅かに頭を下げる。

「予言者ですか」

リルが尋ねるとラミアは再び頭を下げ頷く。

「ラミアさんは大変、優秀な予言者で、過去にも大火事を予言するなどで信頼性も高いんですよ。まぁ、その話はおいておいてリルさん何か気付いた事は？」

「……今夜現れた怪物はワームとは比べものにならないほど精巧で強力でした。あれほどの物を作り操るには1人の魔力では到底、足らないと思います」

「それは、私達も分かっている。だから、これからは複数犯だと考えて動く」

ストラの言葉にリルは首を振る。

「普通ならそう考えるでしょう。けれど、それなら、ワームを単体で使ってた理由がありません。それに今夜の怪物には魔術師の個性というか癖がありませんでした。ここからは推測ですが、犯人は捕らえた魔術師の魔力を取り入れて使用しているんです」

その場にいた全員が驚いた表情を浮かべる。

「そんな事が可能なんですか？」

驚いた表情のままスピンドルが尋ねるとリルは頷いて答える。

「昔、読んだ本によると可能です。ただし、普通なら不可能です」

「どういうことですか？」

スピンドルが聞き返すとリルは再び頷く。

「その方法は本来、魔力を無くした魔術師に魔力を送り再び魔力を使えるようにするものです。しかし、その方法で自分の許容量を超える魔力を入れれば空気を入れすぎた風船のように」

「破裂してしまうんですね」

「はい、ですが、他に何か器があれば、そう、例えば強力な霊獣がいれば出来るかもしれません」

リルは言い切るとふぅと息をついた。

「もし、本当にそうなら。私達の相手は魔術師、３０人以上の魔力を持ってることになりますね」

スピンドルが暗い表情で言う。

第九話　笑顔～忠告～

「あとリルさん。これからも協力してもらえますか？」

「いいですよ」

リルの早い返事にストラは毒気を抜かれたような表情をする。

「お前ライオネルの誘いを断ってたじゃないか」

「ええ、けど、私のやらなくてはいけないこととあなた達の方向性が重なってきたみたいなので」

「君のやらなくてはいけないこととはなんですか？」

厳しい顔でスピンドルが問い詰めるとリルは静かに答えた。

「師匠の遺言です。弟、アルセムが厄介事に巻き込まれている手を貸してやってくれ、だそうです」

神妙になった雰囲気の中ストラだけが訳の分からない表情で辺りを見回す。

「では、あなたはシルフィさんの。なら、あの実力も納得がいきます」

スピンドルが納得したように頷く。

「シルフィっていうと緑の魔法使いだな。それが今回のことと

何の関係があるんだ？」

スピンドルはちらりとヨハネを見て、頷くのを確認すると口を開いた。

「最高位の魔法使いと認められると与えられる色。緑を与えられたシルフィの本名はシルフィーネ・クルシクル。風を自在に操ることから風の使いとも呼ばれた彼女はそこにいるヨハネ様の姉君です」

ストラがヨハネを見るとヨハネは頷く。

「我が王家には女子が産まれても公表しない、という掟があるのはご存知ですね。我が姉は掟に従い秘匿され育てられました。しかし、ある時、城に訪れた魔法使いに素質を見込まれ弟子入りし、魔法使いとして名を響かせることになったのです」

「そして、そのシルフィさんの弟子がリルさんというわけですね」

「リルさん」

ふとヨハネがリルの名前を呼んだ。

「遺言ということは姉は死んだんですね」

リルが頷くとヨハネは目に手を当て、数秒間、身じろぎをしなかったが一呼吸すると先程のことは無かったかのように発言した。

「姉が倒されるほどの敵です。皆さん、くれぐれも注意し捜査

にあたってください」

これといった案も無いまま会議は終わり、リルは帰路を歩いていた。

「リルちゃん」

名前を呼ばれリルが振り向くとハニェルが手を振っていた。

「ハニェルさん？どうしてこんな所に？」

「ライオネル君を病院までね」

リルの心配そうな顔を見てハニェルは命に別状は無いことを告げるとリルの先に立ち歩き始める。

「あの、ハニェルさん」

リルは躊躇いながらハニェルに声をかけた。

「何？」

「私、少し軍の手伝いをしようと思います」

「それで？」

「しばらく、お店には出られないかもしれません。それと、明日からは軍の宿泊施設に泊まります」

「自分で決めたことなんだね」

「はい」

ハニェルはため息をつきながら振り返る。

「リルちゃんが自分でちゃんと自分で決めたなら私は何も言わないよ。でもね、軍に関わるってことは暗くて汚い物を見ることもあるってことだけは覚えておいて」

ハニェルの真剣な視線にリルも真剣な表情で頷いた。それを見るとハニェルは笑顔を浮かべる。

「いつ戻ってきても歓迎するよ」

「はい」

ハニェルの笑顔にリルも笑顔で返した。

第十話　見舞い～方法～

「暇だな」

ライオネルは病院の天井を眺めながらぼやいていた。傷は致命傷でないとはいえ浅くも無いため動くことは出来ず、かといって大人しく読書をできるような性格でも無かったため朝から同じことを既に十回は呟いている。

その時、ドアをノックする音が聞こえライオネルは上体を起こし返事をした。

「開いてるよ」

ライオネルが言うと病室の扉はゆっくりと開く。

「思ったより元気そうですね」

果物の入った篭を持ったリルが言うとライオネルは首を横に振る。

「暇すぎて死にそう」

ライオネルが言うとリルは少し笑いベッドの脇の椅子に座る。

「じゃあ訓練でもすればいいんじゃないですか？」

「しばらくは体を動かすなって医者に言われてんだよ」

「じゃあ、こんなのはどうですか？」

リルはそばにあったティッシュを手に取ると魔力を流し始める。ティッシュは一人でに動き始め、次第に形を作っていき最後は鳥のような形になった。

「魔力操作の訓練です。ライオネルさんは少し魔力に無駄がありますから」

リルはそう言ってからライオネルが自分のことをじっと見てるのに気づく。

「何か変なこと言いましたか？」

リルが聞くとライオネルは黙ってリルを指差す。

「それだよ。前から思ってたんだけど何でいつも敬語？」

リルは少し戸惑った表情をする。

「これは、癖というか」

「それにライオネルさんなんて他人行儀な言い方しなく、ライでいいよ」

「でも……」

「でももへったくれもあるか！！」

ライオネルはリルの両肩に両手を乗せ詰め寄る。

「俺とお前は友達だろ！」

「分かっ……た。ライ。これでいい？」

リルが恥ずかしさに顔を赤らめて言うとライオネルは手を話し微笑んで頷いた。

「それでさっきのどうやんだ？」

「さっきのどうやんだ」

「さっきの？」

リルが首を傾げるとライオネルは机に置いてある鳥の形を模したティッシュを指差した。

あぁ、と頷くとリルは鳥を手に取る。

「まずは魔力を紙に流す。次に流した魔力で形を作っていく。紙は形を分かりやすくするためにあるの。慣れれば」

リルは鳥を持っていない方の手を上に開くと逆の手の紙の鳥と寸分も違わない魔力の鳥が形作られている。

「ふーん」

ライオネルもティッシュに手を伸ばし魔力を込める。が、次の瞬間にはティッシュはボロボロに散ってしまっていた。

「魔力を込めすぎ」

リルが注意すると、分かってると返事をして、次のティッシュに手を伸ばす。魔力が少なく、動かなかったり、やはり、込めすぎたりし、どうにか鳥と分かる形になるころには、すっかり夕方になっていた。

「じゃあ、そろそろ、帰るね」

そう言ってリルが立ち上がるとライオネルは一旦、手を止めてリルをみる。

「ああ。そういえば仕事は？休みなのか？」

「そういえば言って無かったね。私、あなたの部隊の手伝いをする事になって、それまでは、お店はお休み」

ライオネルは驚いた表情を浮かべる。

「お前、無理って」

「うん、けど私のやらなくちゃいけないこととあなた達のやることが重なってきたから協力はするわ」

「そっか」

最後にお大事にと言うとリルは病室から出た。

第十一話　言いあい～立案～

「この町に残っている魔法使いを全員集めるべきです。こんな状態じゃ次に襲われる場所も特定できません。けれど、ひとつに集めれば」

スピンドル、ストラそしてヨハネを前にリルはそう言った。

「それはそうなんですけど」

ヨハネは言葉を濁してスピンドルへと視線を送る。

「魔法使いって人種は、とても厄介でしてね。魔力っていう普通の人間にはない力を持ってるせいかプライドばかり無駄に高い人ばかりで。自分の身は自分で守れるって考えの人が大多数でして」

スピンドルは苦笑いを浮かべる。

「しかも、残ってる魔法使いは、ある程度自分の力に自身のあるやつばっかりで余計にその傾向が強いときた」

最後にストラが両手を挙げお手上げだという意思表示をする。リルはそれを見ると黙ってしまう。

「我々は常に後手回ってしまっています。何とか現状を打開する手がないといずれは全滅してしまいます」

静まりきった会議室でスピンドルの声が響く。

「私が囮になりましょう」

全員の視線がそう言ったヨハネに集まる。

「殿下、それは危険です」

「いえ、私が一番、戦力になりませんし魔力も強くはありませんから取り込まれても大して問題にはならないでしょう」

「ですが」

「魔法使いを狙うってことは魔力を感じているってこと……それなら。あのっ」

ぶつぶつ呟いたあとリルは、何かに気付いたのか言い争っている二人に声をかけた。が、二人は気付かずに言い争いを続ける。

「あの」

「無駄だよ。ああなったら暫くとまらない」

ストラがどこか諦めた様子で教える。

「そうですか」

リルは頷くと左手を握る。そして、それは次第に光を帯びていった。

「だから、そんな危険なこと他のものに任せてください」

「私は皇子だ。この国の民、全てを守らなくてはならないんだ」

「しかし」

スピンドルが反論しようとした瞬間、隣でまるで爆発のような音がして思わず見るとリルの左拳が分厚い机に大きな罅を入れているのが目に入った。

「あの、ですね、私に考えがあるので聞いてもらえますか？」

リルが笑顔で言うと二人は顔を青ざめさせて頷いた。

第十二話　怪物～罠～

僅かな知能と魔力を探知する能力を与えられたそいつは魔力を持った者を連れて来いという単純な命令に従い夜の街を徘徊していた。同時期に生まれた兄弟はほとんどがやられたが次々に新しい兄弟が偉大なる母から生み出された。今は昨日、生まれた弟と共に行動しているが数ヶ月前に比べ魔力を持った者が中々、見つからない。夜明けを告げる朝日が差してきたため家に戻るかというときにそいつはようやく見つけた。黒い髪に黒い服、そして右手に奇妙な手袋をつけている小さい女だ。焦らずに弟に逃がさないように回り込むように指示を与える。そして、戸惑う女をそいつは一気に丸呑みにした。なんとなく違和感を感じたものの小さかったせいだと納得すると岐路についた。

「かかりました」

城の会議室で閉じていた目をそっと開きながらリルは言った。

「そうですか。今、どこにいますか？」

スピンドルが問いかけながら立てかけてあった長剣を手に取る。少し遅れてストラが大剣をヨハネが長剣を取る。

「今、東の方からこちらの方に進んでいます」

リルが言うとスピンドルは少し驚いた表情を浮かべる。

「ここにですか？」

「はい、多分これは地下を通ってきています」

「地下通路」

ヨハネがポツリと呟く。スピンドルがヨハネを見る。

「王家の者と一部の高官のみに教えられている脱出用の地下通路がこの町には通っています。地下だとしたら、多分そこを通っているんでしょう」

ヨハネが言い終わるとほぼ同時にリルが声をあげる。

「止まりました。ちょうどこの下です」

「殿下！！」

スピンドルの声にヨハネは頷く。

「案内しましょう。秘密の地下通路に」

ヨハネが扉から出て行くのを見てリルも立ち上がろうとすると、その肩をストラに抑えられる。

「ストラさん？」

「だめだよ。あんた、魔力ほとんど残ってないだろ。後は大人にまかせておきな」

そう言うとステラは最後に笑顔を見せて扉から出て行く。

「リルさん、病院にいるライを頼みますよ。何が起こるか分かりませんから」

「スピンドルさん」

「大丈夫ですよ。私も次は本気を出しますから」

心配そうなリルの肩をスピンドルは軽く叩くと他の二人と同様に出て行った。

一人残されたリルは右手を握り締めた。

第十三話　通路～犯人～

「ここが入り口です」

ヨハネは歴代の王の肖像画の並ぶ通路の現在の王の肖像画のかかっている場所に立ち止まると肖像画を右にずらした。そこには人一人が通れるくらいの幅の長い階段がかかっている。所々に松明らしき光が暗闇に怪しく揺れている。

「では、私、殿下、ストラの順番で行きます。いいですね」

二人が頷くのを確認してからスピドルは中に入っていった。

十分ほどすると階段は終わり、平坦な道となっていた。幅も馬車、三台分くらいに広がった。

「殿下、犯人に心当たりはないんですか？」

ストラが聞くと、

「あります」

答えはあっさりと返ってきた。

「ここは有事以外は、ある人物のみが入り管理をしていたんです」

「ある人物とは？」

スピンドルが聞くと暫くしたあと言いにくそうにヨハネは答える。

「帝国宰相、トルチャー・デスト」

「それって」

ストラは驚きの声をあげた。

「そうです。考えられる一番の容疑者は英雄にして最年長の色持ち。創造者。……灰の魔法使いです」

「なるほど、リルさんに聞かせなくて正解でしたね。良い判断です殿下」

「聞いたら意地でもついて来たんだろうな。たとえ、自分がどんな状態でも」

「ええ、分かり易い性格なんですよね。人をすごく大切にしている辺りが」

「それにしても、机を壊したのには驚きました」

ヨハネが苦笑いしながら言う。

「本当ですよ。あれは予測できませんでした。殿下？」

スピンドルはそう言ったあと後ろのヨハネが立ち止まったことに気付き振り返る。

ヨハネは直角につきでている脇道を指差す。

「ここは本来、無いはずの道です」

「じゃあ」

「ええ、恐らくこの奥にいるんでしょうね」

スピンドルが言った瞬間、暗闇からスピンドルに向け棍棒による一撃が振ってくる。スピンドルは何食わぬ表情で半歩、後ろに下がりそれをかわすと視線を棍棒を振り下ろした一つ目の巨人の胴体を剣で逆袈裟に切り裂く。そして、奥の暗がりに声をかける。

「言っておきますが、今日は本気です。言ってしまいましたからね」

スピンドルは静かに剣に触れる。触れるとスピンドルの剣は光に包まれ、姿を変え始める。まず、柄の長さが何倍にも伸び細くなっていく、刃は伸びきった柄の側面から出てゆっくりと大きくなっていく。ほんの5秒足らずの時間でスピンドルの持っていた剣は巨大な大鎌へと姿を変えていた。それに少し遅れて、暗がりから飛び出した三体の一つ目の巨人の胴を一振りでまとめて切り裂くとスピンドルはヨハネたちの方へ振り向き声をかける。

「じゃあ、いきましょうか」

「隊長、その鎌は」

ストラが驚いた表情で言うとスピンドルは困った表情を浮かべる。

「私は昔、大きな罪を起こしてしまったことがありましてね、その時、本当の名前と身分を捨てたんです」

その闇を纏った表情にストラもヨハネも何も言えずに黙って聞いている。

「ただ、これだけは捨てられなかった。しかし持っていれば、また、過ちをおかしてしまうかも知れない。だから、せめて、形だけは変えておこうと思ったんです。まあ、暗い話しはこれくらいにして、そろそろみたいですよ」

目の前の通路は切れ、大きな部屋になっているのが他の二人にもわかった。

「さて、いきますか」

三人はスピンドルを先頭に部屋に入っていった。

第十四話　真実～サヨナラ～

ライオネルは、すぐ側で物音がした気がして目を覚ました。目を開けるとリルが椅子に座ったところだった。

「よう、仕事はどうした？」

突然、声をかけられリルは一瞬驚いた顔をする。

「ごめんなさい。起こしちゃった？」

済まなそうでリルが言った。

「別にかまわねぇよ。どうせ、しばらくは寝てるか訓練するかの日が続くかんな」

そう、とリルは頷く。

「この間の訓練、覚えてる？」

「あれか、魔力で鳥を作るってやつか？」

リルは頷く。

「そう、あれは習熟していくと魔力の続く限りは、どんな大きなものでも作れるの。ライさんの魔力なら象くらいまでなら簡単だと思う。けど、私じゃ自分と同じくらいのを作ったら魔力が尽きるの」

「何の話しだ？」

ライオネルは訝しげな顔をする。

「一番、最初の質問の答え。敵の居場所を探る為に私の魔力を囮にしました。魔力の無い私は足手まといになるから……」

「隊長達は行ったんだな。まぁ、あの人達なら大丈夫だと思うけど」

「……それは、どうでしょう」

リルが暗い表情を浮かべる。

「どんな方法を使ったのかは知らないけど、私の師匠、緑の魔法使いを倒すほどの相手。スピンドルさんの実力を、よくは知らないけど、簡単に勝てるとは思えない」

ライオネルは黙って聞くと机に手をつき、立ち上がる。が、よろめき倒れそうになる。

「ライさん！！」

リルは慌てて、ライオネルの体を支える。

「何してるんですか！！」

叫び声を上げるリルをライオネルは見つめる。

「勝てないのかもしれないなら、助けに行く」

「そんな体じゃ死ぬだけだよ」

リルは冷たく言う。が、ライオネルはリルの手を振り解き、外に行こうとする。しかし、ライオネルの足は突然、止まる。

「足が動かない！！」

ライオネルは数回、足を持ち上げようとする動作をするが足は持ち上がらない。そこに、リルの声が落ちてくる。

「今より、ちょっと昔、とある街で一人の女の子が産まれました。その子は生まれながらにして強大な魔力を持っていました。しかし、その事が災いして、その子は魔族に目をつけられます。そして、その女の子が六歳になった時、魔族はその女の子に取り憑こうとします。けれど、魔族には誤算がありました。女の子の魔力は、あまりに強大だったのです。取り込む筈だった少女の右腕に入った時、逆に消滅、取り込まれてしまいました。

……けれど、少女にも影響がありました。魔族の持っていた憎悪、恐怖負といった負の感情が全て、流れ込んで来たのです。少女は衝動に任せ破壊の限りを尽くしました。運良く居合わせた魔法使いが少女の強大な魔力を使い、負の感情を、その右手に封印することに成功します。しかし、その村に少女の居場所はもう、ありませんでした。その後、少女は追い出されるように魔法使いに従い村を出ました。数年後、少女は都に出て、いろいろな人と出会います。少女には守りたいものが出来ました。自分を犠牲にしても……」

リルはゆっくりと扉まで歩くとライオネルの方へと笑顔で振り向く。

「大丈夫だよ。ライさん。私には力があるんだから」

「リルっ」

「さようなら。最初で最後の友達」

リルがそう言った瞬間、ライオネルの意識は闇に沈んでいくのを感じた。

倒れてきたライオネルを受け止め、ベッドに寝かせるとリルは病室の外に出る。そして、目を閉じ左手を右手の手袋に伸ばすと一瞬、躊躇うも一気に外す。その瞬間、服の背中の中央が盛り上がり、破り、漆黒の翼が生えてくる。手袋を外した右手は同様な漆黒の鎧のようなものに包まれ、その指は鋭く尖っている。リルは目を開く。その目は血のような赤だ。リルは感触を確かめるように右手を開け閉じすると目にも止まらないスピードでその場から姿を消した。

第十五話　最強～危機～

暗い部屋では1人の男が椅子に座り、何やら作業をしている。男の前には空の巨大なフラスコが設置されている。そこにコツコツと足音が響く。

「宰相。いえトルチャー。誘拐、及び反逆の罪で、あなたを逮捕します」

スピンドルが言うと後ろにいる二人は武器を構える。

「ほぅ、もう来たのか。しかも、三人も」

男は振り返って三人の顔を見渡す。　そして、スピンドルのところで視線を止める。

「懐かしい顔じゃな」

「8年振りになります。どうやら、騙し討ちが得意なのは変わらないようですね……出てきたらどうですか？」

スピンドルは背後に手の平を向けると炎の玉が打ち出される。弾けた火の玉の煙の中から奇妙な獣が飛び出し○○の横に座る。大きさは馬よりも二周りは大きく、鋭い牙が口から見え隠れしている。胴体は固そうなしま模様の毛皮に包まれている。

「ほっほ、こやつの気配に気がつくとは流石は赤の魔法使い、ゾル・スカート。戦闘能力だけなら帝国一と言われるだけはある。緑の魔法使いは気づけなんだ。紹介しよう。我が最高傑作、アーサ

ーじゃ」

〇の声に答えるように獣、アーサーが雄叫びを上げる。

「ゾル・スカートと言う名は捨てました。なるほど、これが30人以上の魔法使いの魔力を持った魔獣ですか」

「ほっほっほ、気付いておったか。そう、こやつは魔力を入れる器。本当の使い方は」

トルチャーが右腕を差し出すとアーサーは鼻先をそれに近づける。するとアーサーの体はゆっくりと〇の右腕に入っていく。そして、トルチャーは右腕から肩にかけて二倍ほどの大きさに膨らみ、しま模様の毛皮に包まれ爪は鋭い刀のように伸びる。

「準備完了じゃ。どこからでもかかって来い」

スピンドルは鎌を構える。

「いいですか、ストラは前衛、殿下はサポートを」

スピンドルの指示に従いヨハネは後ろに下がり、ストラは大剣を引きずりながらトルチャーに向かい飛び出す。勢いに乗ったままストラは大剣を振り下ろす。

「何！！」

しかし、想像していた感触をストラは得られなかった。避けられるのは想像していた、しかし、実際は腕で、しかも無傷で受け止

められている。

「いい太刀筋じゃ。しかし、今の私にそんなものは通用せんよ」

トルチャーはそう言うと右手を振り払い、ストラをふっ飛ばすと背後に振り向き雷の玉を飛ばす。雷の玉はストラを囮に背後から切りかかろうとしたスピンドルに直撃する。辛うじて鎌で防御するが雷は鎌を通電する。

「くっ」

「やはりの、お主ならそうすると思ったぞ」

トルチャーはゆっくりとスピンドルに拳を振り上げる。と、そのまま横にステップして横にズレる。そこをヨハネが撃った風の刃が通過する。刃は、そのままスピンドルへと向かう。スピンドルは辛うじて横に跳び、それを避ける。

「どうした？わしはまだ、半分も力を出しておらんぞ」

トルチャーが嘲るように言う。

「ストラ、殿下、下がってください。奴は戦いの場を操るスペシャリストです。下手な攻撃は仲間討ちになります。私が一気に決めます」

スピンドルはヨハネとストラが自分の後ろに下がるのを確認すると鎌を置き目を閉じてトルチャーに向け両手を上下に大きく開く。

「ほっほ、来るか。では」

トルチャーも同様に両手をスピンドル達に向ける。

時間と共にスピンドルとトルチャーの手の平の前に赤い炎の玉が少しずつ大きくなっていく。それが人と同じ位の大きさになった時、スピンドルは目を開く。

「くらいなさい」

大きな火の玉が向かってくる中、トルチャーは火の玉がスピンドルと同じ位の大きさになるのを見計らい撃ちだした。トルチャーの火の玉はスピンドルのを飲み込むと大きさを増し、スピンドルを飲み込み、爆発した。

「隊長！！」

ストラが叫び声をあげる。

「流石じゃの。あれをくらい生きているうえに後ろの二人に被害が及ばないように衝撃を受け流すとは……しかし、もう戦う力は無いだろう」

煙が晴れると体中から血を流しながらも立っている姿があった。

「……ストラ、殿下を連れて逃げなさい」

スピンドルはよろめきながらストラに言う。ストラが困惑した表情でヨハネを見る。

「殿下……」

「私のことを気にする必要はありません。あなたの思うようにしてください」

ヨハネがそう言うとストラは頷き、スピンドルの前に出て構える。

「隊長1人を犠牲には出来ませんよ。それに、負けと決まったわけではないですよ」

ストラの言葉を聞いてトルチャーは鼻で笑う。

「わしの戦術に強大な魔力が加わった今、わしは無敵じゃ、そんなこともわからんのか？」

「私はまだ戦える。可能性を捨てはしない」

「ふん、では死ぬがいいわ」

トルチャーはそう言うと魔獣の宿る右腕をストラに振り下ろす。ストラはそれを大剣をかざし防ごうとした。

鈍く光る鉛色大剣のかけらと共に赤い血をまき散らしながら肌色の細長い棒のようなものが宙にまう。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

ストラは右腕のあったはずの肩を左手で抑えながら叫び声をあ

げる。体を狙ったトルチャーの一撃わ大剣を破壊した。そして、僅かに軌道のそれた、それはストラの右腕を肩から断ち切った。

「ストラ」

スピンドルは駆け寄ろうとするが、足がもつれ倒れてしまう。

「黙ってみておれ、お主は、この女を倒した後、始末してくれよう」

スピンドルに言うとトルチャーはストラの頭を鷲掴みにする。

「愚か者め逃げてれば良かったものを」

「愚か者はおめーだ。クソ野郎」

突然、背後に現れた声に思わず振り向いたトルチャーの右腕に強烈な一撃が入る。解放されたストラを受け止めるとスピンドルの近くまで下がる。　そこで、ようやくトルチャーは新たな敵の全貌を見る。黒い肩まで伸びた絹のような髪、血よりも赤いルビーのような瞳、肩から右腕、全てを包む怪しく光を反射する漆黒の甲殻、背を覆う爬虫類のような翼。リルと呼ばれた少女だった。

「リルさん……ですか？」

スピンドルが驚きながら聞く。

「あぁ、ライに全部、話してある。詳しくはアイツに聞け。納得したらさっさと帰れ、邪魔だ」

「けれど」

「邪魔だっつってんだろ！！」

怒鳴られ、納得いかない表情ながらもスピンドルは気絶しているストラを抱え、ヨハネを連れ添って上へ戻っていく。

「待たせたな始めようか。死のダンスを」

トルチャーは混乱していた。突然、現れた異形の少女。その少女の放つ圧力。そして、無敵になった筈の自分が感じる震えの正体。

「お前は何者だ！！」

思わずトルチャーは怒鳴っていた。

「魔族を取り込んだ魔法使い。お前を殺しに来た悪魔だよ」

リルはそう言って微笑んだ。

第十六話　悪魔～恐怖～

「私を殺す……だと」

トルチャーは下を向いて震える。

「どったの？」

「舐めるなぁぁ！！」

トルチャーは一気に近付くと右手で小柄なリルを叩く。リルは壁にぶつかる。轟音を立て壁は砕ける。

「ふふふ、フハハハハハぁ。どうだ、見たか！！何が悪魔じゃ、わしはそんなものには負けん。わしは最強なんじゃ」

ひとしきり笑ったあと、トルチャーは出口に足を向ける。

「さて、逃げた奴らでも追うか」

「おい、何処に行くんだよ？」

聞こえる筈の声に驚きを隠せないでトルチャーは振り返る。

「まさか、あの程度のことでオレが死んだとでも思ったのかよ」

リルはゆっくりとトルチャーに近付く。トルチャーは思わず後ずさる。

「バカなぁぁ」

トルチャーは大量の火球を撃ち出す。が、全てリルに届く前に消えてしまう。

「これは！！馬鹿な３０人以上もの魔法使いの魔力が、たった１人に劣っているというのか」

「魔族の魔力に、それ以上のオレの魔力だ。当然だろ」

言いながらリルは落ちていたスピンドルの大鎌を拾う。

「飽きてきたし、そろそろ終わるか？」

微笑んで放たれた言葉にトルチャーは顔色を無くし出口に走り出す。

「おいおい、逃げるのはねぇだろ」

リルは一瞬で回り込む。そして、鎌を一振りする。

「ぐあぁぁぁ」

トルチャーは斬られた太ももを抑える。

「これで、もう逃げられない」

リルが笑みを浮かべながら言うとトルチャーは苦々しい表情を浮かべると右手をリルに向け魔法を使おうとする。しかし、魔法が撃たれる前に、右腕はゆっくりとズレて床に落ちる。

「これで、魔法も使えない」

トルチャーは喚きながら左手でつかみかかろうとする。

「ククク。これで、両腕が無くなった」

リルは、そう言って頬に飛んだ返り血を舐めとる。トルチャーはもはや倒れた体を起こすことも出来ずにいる。

「ハハハハハ。まるで芋虫だな。おい」

我慢出来ないように大声でリルは笑う。

「おい、最後に言うことはあるか？」

リルはトルチャーの髪を引き顔を上げさせると聞いた。

「化け物め」

トルチャーが吐き捨てるように言うとリルは笑みを深くして言う。

「そうさ、オレは悪魔さ」

リルは大鎌を振り下ろしトルチャーの首を断ち切った。

最終話

それからリルは俺達に顔も見せずに去って行った。

隊長もストラさんも大怪我だったが命に別状は無かった。地下にはトルチャーの死体と捕らわれていた魔法使いが発見された。捕らわれていた人達に別段、異常は無く。その、ことを隊長に報告すると、そうですか、と少し悲しそうな表情で笑った。

ストラさんはリルのことを大体は気づいていたらしい。何でも、リルの産まれた村はストラさんの産まれた村と同じらしい。もっともリルの産まれる前に違う村に移ってしまったため、2年前、たまたま寄った時に耳に挟んだらしい。「あの子の親は子供を手放したことを凄い後悔してたよ」としみじみと語った。

事件の後、いろいろな事が一気に起きた。
まず、ヨハネ殿下が正式に国王になられた。それに伴って隊長はトルチャーの席だった宰相になった。あの人達ならこの国を正しく導いてくれるだろう。

ストラさんは利き腕を失ったことで軍を止めた。今、何をしているかと言うと主婦をやっている。何と隊長がプロポーズ。それに、ストラさんは「この腕の責任とかじゃ無いなら、喜んで」と受けたらしい。個人的には二人はお似合いだと思う。

リルは今回の功績で黒と言う色を与えられた。しかし、授与式には、やはり、リルの姿は無かった。どこに行っちまったんだよ。

そして、俺は……

「ライ隊長、ちょっと来てください」

部下の呼びかけにライオネルは筆を置くと日記を閉じて、槍を持つと扉を出て行く。

（リル、お前が守った街は俺が守っていくよ。……だから、いつかまた顔を見せに来てくれよ）

とある港町の酒場で黒髪、黒い瞳で右手に手袋をつけた少女が給仕をしている途中、ふと、何かを感じたように窓の外を見つめる。

「どうかしたの？」

甘栗色の髪をツインテールに結った同業の少女が黒髪の少女に声をかける。

「ううん、何でも無い」

黒髪の少女は窓の外を見ながら答えた。

最終話（後書き）

最後までお付き合いしてくださった方、ありがとうございます。次の作品は今回、ほとんど出番の無かったシルフィを中心にしたものです。題名は〔緑の魔法使い〕です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7674e/

黒の魔法使い

2010年10月23日13時19分発行